

第78回麻布獣医学会 一般講演3

ラット漿膜系のリンパ管排導路およびその漏出について

山口 真司¹, 柴田 真治², 市原 伸恒¹, 浅利 昌男¹, 早川 敏之³¹麻布大学解剖学第一研究室, ²関動物病院, ³東京慈恵会医科大学解剖学講座第一

今回、漿膜系の排導路およびその漏出についてラット10匹を用いて実験を行なった。ラットのリンパ管走行について詳細に調べた報告には妹尾（1981）の報告が認められる。妹尾によると、横隔膜のリンパ管の排導路には①横隔膜、肋間から起こり腹側に内胸動脈に沿い上前縦隔リンパ節内側群に注ぐ経路、②横隔神経あるいは後大静脈に沿って胸郭前口に向かい、上前縦隔リンパ節内側群に注ぐ経路、③胸椎側リンパ管幹に注ぐ経路が左右夫々に認められ、それらに加えて乳び槽リンパ節を介して大動脈右側に併走する胸管に注ぐ経路の計7つの排導路が報告されている。今回の実験の結果でそれら7つの排導路のうち、胸管での排導は肉眼で10例中1例にのみ確認され、胸管の排導は極めて速やかに行われると考えられた。また他の排導路については、所属リンパ節があるため、その移動に経時的な変化が認められたものと思われる。さらに今回の結果では横隔膜の排導路では右側の方がより多くの排出に関わっ

ているという結果が認められたが、これはリンパ管が圧力によってその盲端が開くという性質を考慮すると、ラットの横隔膜は呼吸運動に際し、接している肝臓により、右側は左側よりも大きな圧力を受けているのではないかと考えられた。

またこれらの実験の過程において、現在までに報告のされていない排導路として第8肋間の横隔膜付着部より第10肋間部胸椎側リンパ管幹に走行するリンパ管が10匹中1匹の左側胸壁内に認められた。妹尾の報告に今回観察された様な走行の排導路の報告はなされていない。この様なリンパ管の走行は非経節リンパ管、あるいはjumpin lymphatic metastasis（跳躍転移）を暗示するような所見であり、漿膜系の排導路における走行異常の一つと思われるので、今回のこのリンパ管の走行については、さらに例数を重ね、同リンパ管の出現頻度や左右差や腹側ならびに背側への主リンパ幹管との結び付きなどについても注視してゆきたい症例報告と思われる。